

II 青森県民の自己有用感とその形成要因に関する考察

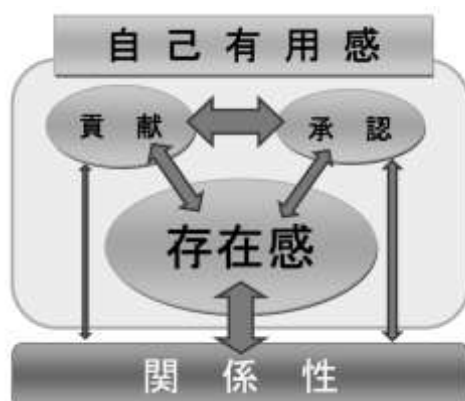
青森大学 社会学部 教授 柏谷 至

1. はじめに～自己有用感をめぐる分析視角～

本節では、「郷土を愛する心に関する県民の意識調査」（以下「本調査」と略称する）の結果のうち、青森県民の「自己有用感」の現状とその形成要因について考察する。

「自己有用感」とは、他者や集団との関係を通じて形成される「自分は価値あるものである」という感覚を指す（図 1）。青森県教育委員会が昨年度実施した「若者の学習・生活体験と県内定住に関する県民の意識調査」（以下「2016年調査」）では、栃木県総合教育センターが使用した自己有用感尺度を用いて、青森県内に在住する若者（18～35歳）の自己有用感を測定した。

図 1 自己有用感の構成要素と「関係性」(栃木県, 2013)



その結果からは、自己有用感が客観的な基準から測定可能であること、自己有用感が若者の意識や行動を説明する要因として利用できることが明らかになった。また、結婚・子育てや仕事といった回答者の状況や、子ども時代に各種の体験活動を経験したかによって、自己有用感に差が生じていることも分かった（青森県, 2017: 33-39）。

2016年調査の結果を踏まえ、本調査の分析にあたって注目した点は大きく2つある。第1は、年齢・世代による自己有用感の違いである。「近年の若者には自己肯定感を持ってない人が多い」としばしば指摘されるが、これがどの程度、データで裏付けられるだろうか。

第2の視点は、自己有用感の形成要因についてである。ある人が現在置かれている状況と、その人の子ども時代の経験は、どのように自己有用感に影響を与えているのだろうか。本節では、この2つの分析視点を中心に、青森県民の自己有用感の現状と形成要因について分析を行っていく。

2. 自己有用感尺度の作成とその有効性

自己有用感尺度の作成に使用したのは、質問紙の間4「あなた自身と家族との関わり」および間5「学校、職場、地域など、周囲の人との関わり」である。基本的に質問内容は2016年調査と同じであるが、1項目（「重要な一員だと思う」）を追加するとともに、選択肢を4段階から5段階に変更（「どちらとも言えない」を追加）している。

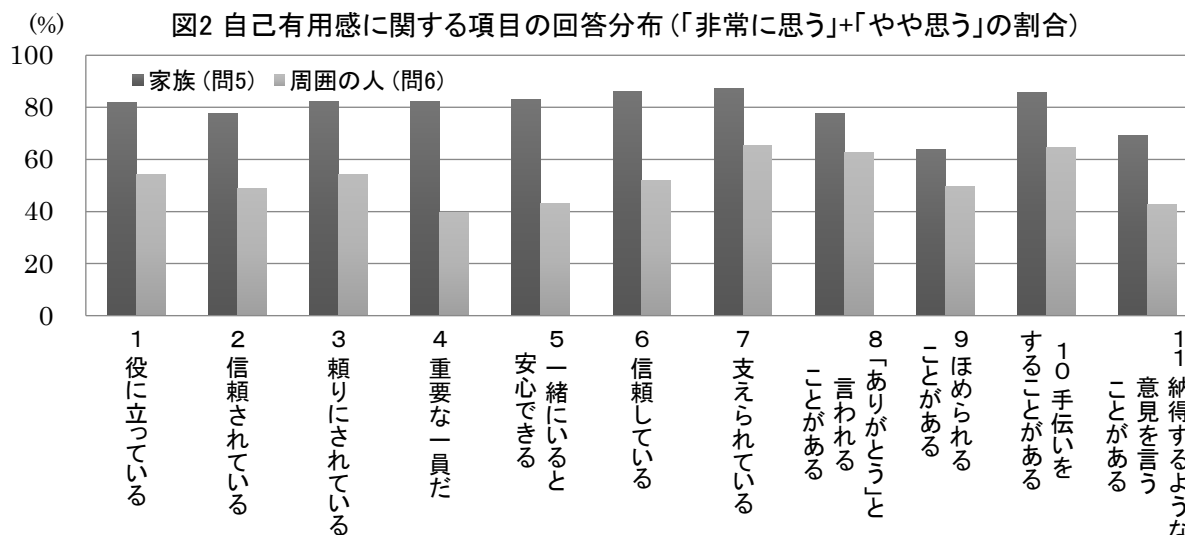


図2に各項目の回答分布（「非常に思う」と「やや思う」の合計）を示す。家族との関わりと家族外との関わりを比較すると、肯定的な評価を示す割合は家族との関わりの方が高くなっている。これは2016年調査と同様の傾向であるが、両者の差はより大きくなっているようである。

自己有用感尺度を作成するために、まず各項目の回答結果を因子分析し、「自己有用感」を表す因子と「関係性」を表す因子の2つを抽出した。そこから、「家族関係における自己有用感」と「家族との関係性」の尺度、および「家族外関係における自己有用感」と「家族外の関係性」の尺度を作成した¹。

表1 自己有用感尺度の基本統計量

	平均値	中央値	分散	標準偏差	最小値	最大値
自己有用感(家族)	4.0	4.1	0.58	0.76	1.0	5.0
関係性(家族)	4.3	4.7	0.69	0.83	1.0	5.0
自己有用感(家族外)	3.4	3.5	0.64	0.80	1.0	5.0
関係性(家族外)	3.5	3.7	0.71	0.85	1.0	5.0

¹ 因子抽出には最尤法を、軸の回転にはプロマックス回転を用いた。回転後の因子負荷量は下表の通り。

項目	家族		家族外	
	因子1	因子2	因子1	因子2
1 役に立っている	0.90	-0.06	0.89	-0.03
2 信頼されている	0.86	0.02	0.97	-0.07
3 頼りにされている	0.93	-0.05	0.94	-0.03
4 重要な一員だ	0.78	0.13	0.81	0.10
5 一緒にいると安心できる	0.10	0.80	0.15	0.68
6 信頼している	-0.03	0.94	-0.02	0.84
7 支えられている	-0.09	0.93	-0.15	0.94
8 「ありがとう」と言われることがある	0.28	0.51	0.31	0.57
9 ほめられることがある	0.37	0.40	0.45	0.42
10 手伝いをすることがある	0.45	0.19	0.38	0.45
11 納得するような意見を言うことがある	0.66	0.04	0.55	0.26
因子間相関	0.68		0.74	

この結果をもとに、「自己有用感」の尺度として各回答の項目1~4および8~11の算術平均を、「関係性」の尺度として項目5~7の算術平均を求めた。各尺度の信頼性係数（クロンバックの α ）を以下に示す。

自己有用感(家族内) 0.919 関係性(家族内) 0.914
 自己有用感(家族外) 0.946 関係性(家族外) 0.876

この尺度は、数値が大きいほど自己有用感が高く、小さいほど低いことを表している。各尺度の基本統計量を表 1 に示す。

自己有用感は、回答者の意識や行動に大きな影響を与えている²。例えば、「困った時に相談に乗ってくれる人」「個人的な悩みを話せる人」など、人的ネットワークの有無や人数を問う設問（問 2）では、自己有用感の得点上位 25%と下位 25%の回答者グループには明瞭な差が現れた（図 3a,b）。自己有用感の高い回答者では人的ネットワークを持っている割合が高く、自己有用感の低い回答者はそうした人が「いない」と答える割合が高いのである。

図3a 自己有用感(家族)と
人的ネットワークの有無

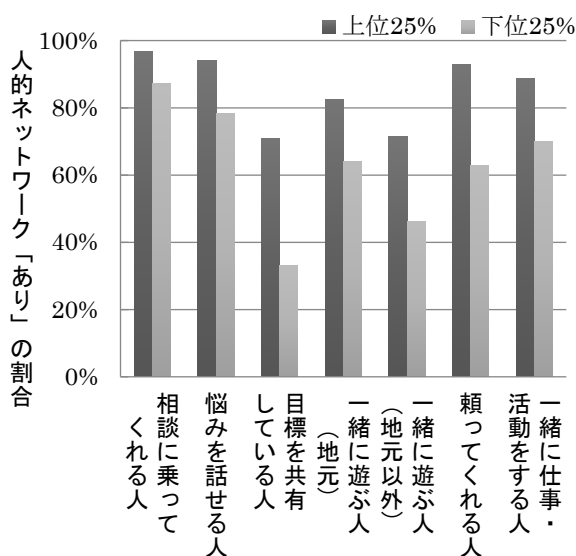
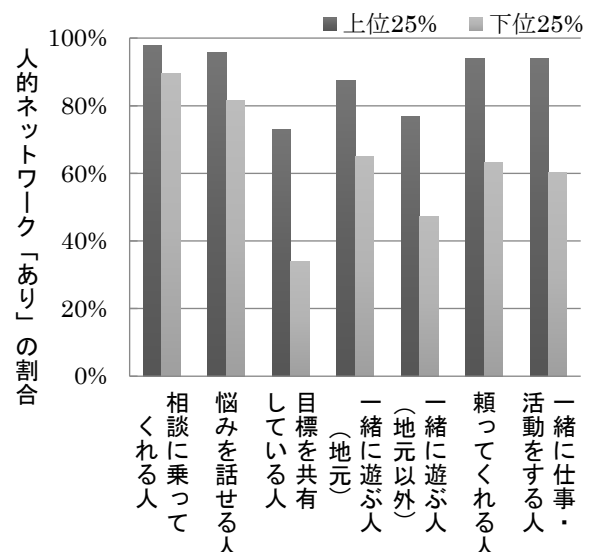
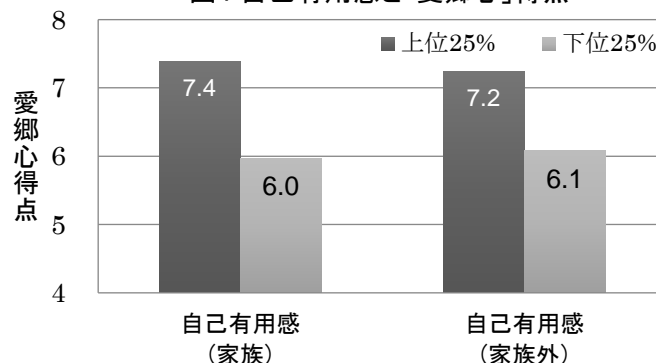


図3b 自己有用感(家族外)と
人的ネットワークの有無



もうひとつ例を挙げよう。回答者が「郷土を愛している」と感じる程度を 0~10 点で評価してもらった設問（問 9）の平均値を比較したのが図 4 である。自己有用感の高いグループの方が、低いグループよりも、より強く「郷土を愛している」と感じていることが分かる。「郷土を愛する心」の形成基盤の詳細な分析結果については、別の節で詳しく議論されているので、そちらを参照していただきたい。

図4 自己有用感と「愛郷心」得点

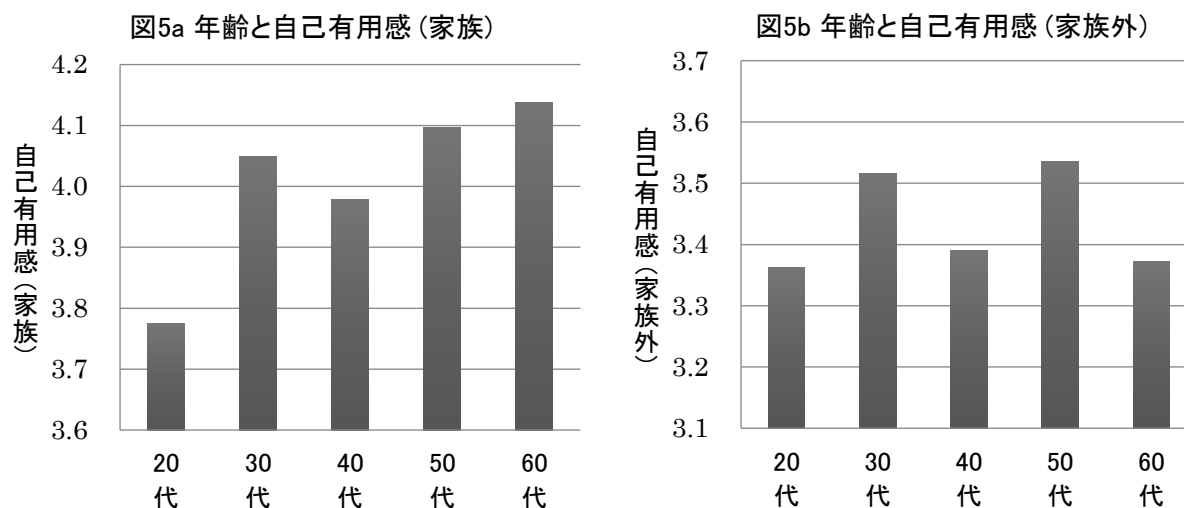


² 特に断りのない限り、以下の分析では比率の差は χ^2 検定によって、平均値の差は一次元配置の分散分析によって、有意水準 5% で検定を行った結果を紹介している。

3. 年齢・世代と自己有用感

2016年調査は対象者の年齢を18～35歳に限定していたのに対し、本調査は調査の対象年齢を20～69歳に拡大している。年齢によって、回答者の自己有用感はどのような影響を受けているだろうか。

図5a,bは、年齢層（問12-1）別に見た自己有用感の平均値を示したグラフである。2016年調査では年齢による自己有用感の差は見られなかったが、家族内での自己有用感は年齢が高くなるほど高くなっており、特に20歳代の自己有用感の低さが目立つ³。これに対し、家族外での自己有用感では年齢による差は見られるものの、若年層ほど自己有用感が低いとは言えない。



年齢は回答者の社会的状況や態度・行動と密接に関連している（第3章Iを参照）、年齢と自己有用感の関係については慎重な検討が必要である。2016年調査では自己有用感に影響を与える要因として、結婚（既婚か未婚か）や仕事の有無、職業内容、子ども時代の経験などが指摘された（青森県、2017:37）。回答者の現在の社会的属性と子ども時代の経験が自己有用感にどのような影響を与えているか、また、そこに年齢がどう作用しているかを分析する必要がある。

そこで重回帰分析を用いて、複数の要因が自己有用感に与える影響の強さを評価した。重回帰分析は、複数の説明変数（原因）から被説明変数（結果）を予測する数式をつくり、それぞれの説明変数がどのくらいの影響力を持っているかを評価する手法である。説明変数には回答者の社会的属性と子ども時代の経験（表2）を、被説明変数には家族および家族外での自己有用感を設定した。

表2 重回帰分析に投入した説明変数

社会的属性	年齢、性別、居住地（地区別、市部/町村部）、最終学歴、出身地（青森県内/県外）、職業（あり/なし）、世帯収入 ⁴
子ども時代の経験	生活経験（手伝い、親密さ、体験） ⁵ 、対人経験（受容的、指導的、近隣） ⁶

³ 分散分析の多重比較の結果によると、20歳代の自己有用感の平均値は、30歳代・50歳代・60歳代の平均値と比較して有意に（ $P<0.05$ ）低かった。

⁴ 職業の有無については、問14-1の12の選択肢（「その他」を除く）のうち、「専業主婦、主夫」「学生」「無職」を「職業なし=0」、その他の回答を「職業あり=1」としたダミー変数を作成した。世帯年収（問14-2）については、「無収入」を0円、それ以外の回答はカテゴリーの中央値（例えば200万円以上400万円未満の場合、300万円）とし、「わからない」（83人）は無回答として分析から除外した。

⁵ 「小学校時代の生活習慣」（問1-1のb）の項目を以下のように分類し、それぞれの回答の算術平均を尺度とし

4. 自己有用感の規定要因～現在の境遇と過去の経験～

自己有用感の規定要因を重回帰分析した結果を、表 3a,b に示す。いずれの場合も、投入した説明変数のうち 6 つの変数を使った説明モデルがつけられ、モデルの決定係数（回答者ごとの自己有用感の違いをどの程度説明できるかを示す）も十分に高かった。

表 3a 自己有用感 (家族) の重回帰分析			表 3b 自己有用感 (家族外) の重回帰分析		
変数	相関係数	標準偏回帰係数	変数	相関係数	標準偏回帰係数
対人経験 (受容的)	0.36***	0.33***	対人経験 (受容的)	0.35***	0.30***
年齢	0.11***	0.25***	職業 (なし/あり)	0.23***	0.21***
世帯収入	0.16***	0.11***	対人経験 (近隣)	0.28***	0.13***
生活経験 (親密さ)	0.23***	0.11**	年齢	0.02	0.12***
性別	0.13***	0.09**	生活経験 (手伝い)	0.17***	0.07*
対人経験 (近隣)	0.21***	0.06*	世帯収入	0.16***	0.07*
決定係数 (R²)	0.21***		決定係数 (R²)	0.21***	

*は P<0.05、**は P<0.01、***は P<0.001 を表す

投入した説明変数が自己有用感をどのくらい説明できるかを示す指標が、表中の標準偏回帰係数 (β) である。すなわち、家族における自己有用感に最も強く影響を与えているのは、子どもの頃の「受容的な対人経験」であり、次が現在の「年齢」である。さらに現在の「世帯収入」、子どもの頃の家族との「親密さに関わる生活体験」、「性別」(男性が低く女性が高い)、子どもの頃の「近隣との対人経験」の順番で、影響力が小さくなる。家族外における自己有用感でも同様に、「受容的な対人経験」、現在の「職業」(職業なしが低くありが高い)、「近隣との対人経験」、「手伝いの経験」、「世帯収入」が説明力の高い変数として選び出された。

ここで注目すべきなのは、年齢が高い説明力を持っていることである。図 5b と同様に、単独で比較した場合には、年齢と家族外の自己有用感との間には、統計的に有意な相関は見られない。にもかかわらず、他の変数の影響を除外した偏回帰係数の数値を見ると、年齢が低い回答者で自己有用感が低く、年齢が高い回答者では自己有用感も高い傾向が見られるのである。

その理由は、年齢が子ども時代の経験にも影響を与えていることにある。自己有用感との関連が深

た。各尺度は、数値が大きいほどその生活体験の頻度が高かったことを示している。

- ・ 手伝い…(2)ふとんの上げ下ろしやベッドの整頓、(5)買い物の手伝い、(6)料理の手伝い、(7)掃除やごみ出しの手伝い、(8)洗濯の手伝い
- ・ 親密さ…(1)あいさつ、(9)誕生日を祝う、(10)季節の行事をする
- ・ 体験…(11)家族旅行、(12)スポーツや自然の中での遊び

各尺度の信頼性係数(クロンバックの α) は順番に、0.816、0.750、0.717 となった。

6 「子どもの頃の人間関係」(問 3) の項目を以下のように分類し、それぞれの回答の算術平均を尺度とした。各尺度は、数値が大きいほどその経験が頻繁にあったことを示している。

- ・ 受容的…(1)親にほめられた、(3)親に勉強を見てもらった、(4)親に読み聞かせをしてもらった、(6)親に社会のルールやマナーについてしつけられた、(7)親と人生や将来について話をした、(8)先生にほめられた、(11)友だちにほめられた、(13)友だちに悩みを聞いてもらったり相談に乗ってもらった
- ・ 近 隣…(16)近所の人に遊んでもらった、(17)近所の人に教えてもらった
- ・ 指導的…(2)親に厳しく叱られた、(5)親にやりたいことやほしいものを我慢させられた、(9)先生に厳しく叱られた、(12)友だちに注意された、(15)近所の人に注意された

各尺度の信頼性係数(クロンバックの α) は順番に、0.843、0.828、0.728 となった。

い子ども時代の経験と回答者の属性との関係を重回帰分析で見ると、年齢は「生活経験（親密さ）」や「対人経験（受容的）」と偏回帰係数がマイナスになっている。つまり、これらの経験をする頻度は、高年齢ほど低く若年層ほど高くなっている。

表 4 子ども時代の経験に影響を与えている要因
(重回帰分析の標準偏回帰係数)

回答者の属性	生活経験 (手伝い)	生活経験 (親密さ)	対人経験 (受容的)	対人経験 (近隣)
年齢		-0.35***	-0.32***	0.10***
性別	0.25***	0.14***	0.12***	-0.08**
出身地 (県内/県外)		0.14**	0.08**	0.08***
居住地 (市/町村)			-0.07**	
決定係数 (R ²)	0.07***	0.15***	0.13***	0.02***

*は P<0.05、**は P<0.01、***は P<0.001 を表す

家族との親密な生活経験や受容的な対人関係の経験は、自己有用感にプラスの影響を及ぼす。こうした影響は、若い回答者の方が大きくなる傾向がある。しかし、子ども時代の経験の影響を除いてみると、若い人ほど自己有用感が低くなる傾向がより明確に見て取れるのである。

5. まとめと考察

ここまで分析してきたように、年齢は2つの経路で、自己有用感に異なる影響を与えていると考えることができる。まず、年齢は自己有用感に独自の影響を与えており、年齢が低い回答者ほど自己有用感が低くなっている。その理由について本調査のデータから確定的な結論を出すことができないが、本調査で測定していないような要因—例えば結婚や子育ての経験、雇用の安定性、価値観の変化など—の存在が示唆される。いずれにせよ、「若者の自己有用感の低下」が、本調査のデータから裏付けられたことになる。

もうひとつの経路は、子ども時代の「受容的な対人体験」や「親密さに関わる生活体験」を通じた影響である。これらの経験を頻繁にした回答者は自己有用感が高くなる傾向にあるが、こうした経験をした人は、年齢が低いほど多いのである。

ほめられる、悩みを聞いてもらえる、一体感をもてるといった体験は、若者の自己有用感を高める効果を持っている。若者をめぐる社会的状況が厳しさを増していく中で、家庭や学校、地域社会が若者の自己有用感を高めうる経験を提供することの重要性が、いっそう大きくなっていることを示す結果と言えるだろう。

参考文献

青森県教育庁生涯学習課(編)『若者の学習・生活体験と県内定住に関する県民の意識調査報告書』(平成28年度生涯学習・社会教育総合調査研究事業)青森県教育長生涯学習課。

栃木県総合教育センター 2013 『高めよう! 自己有用感～栃木の子どもの現状と指導の在り方～』栃木県総合教育センターWeb サイト (http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h24_jikoyuyokan/)。